

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

反日感情：国史認識とその相互作用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 心平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008962

第 10 章

反日感情

——国史認識とその相互作用

太田心平

「中国人や韓国人は反日感情を持っているので何をするかわからない」。日本で時おり耳にする言葉である。特に、尖閣諸島（釣魚島）と竹島（獨島）の領有権問題や、歴史教科書問題、従軍慰安婦への謝罪と補償の問題、そして政治家の靖国参拝問題などがクローズ・アップされ、それらに抗するデモや集会が東アジアの随所でくり広げられることで、「反日感情」という目にみえぬものが日本に暮らす私たちの不安や警戒を煽ってきた。

近年、「反日感情」はタイムリーなニュースとして報道される向きがある。1982年には日本の歴史教科書の記述が「華北を侵略」から「華北に進出」とあらためられ、続く90年代には世界的に領海線の確定が急がれるようになって、日本と中国・韓国の主張の差が際立ち始めた。特に今日では、メディアが「反日感情」をさかんに喚起する。とはいえ、当該の方面で日本が主張する領土は太平洋戦争の敗戦時からほぼ現在のとおりであり、竹島などの領有権問題もいまになって始まったことではない。こうした軋轢の構図は19世紀後半から長期的に不変であるとの見方さえ可能であり（崔，2002）、「反日感情」を今日的な問題とすることは出来ない。また、少なくとも現状において事態の抜本的な好転が見込めない以上、むしろ私たちは「反日感情」を、東アジアの社会が過去から未来へと持ち越してゆこうとする課題として考えるべきである。

「反日感情」が妥当か、それとも不当かという議論は、歴史学や政治学や社会学の研究者たちが得意とするところだ。だが、他方で人間の感情というものは、何が真で何が偽か、はたまた善とは何か悪とは何かという認識とはまったく別に生成され、人々の行為を左右していく（Weber, 1922=1972: 41）。もしも「反日感情」の明確な先導役が存在するならば、その者の主張を検討して論理

の正当性を検討することも出来ようが、実際のところ「反日感情」の発生と高揚は複雑に絡み合った事情の中で起きており、その主体を特定することは不可能である。しかも、人をつき動かす動機というものは、常に当事者に意識されるとはかぎらない。要するに、「反日感情」の基底には、合理的にいつて何が真で善か、誰が煽動しているかという点で曖昧模糊とした部分があり、その部分はまた、当事者の言い分を吟味するだけでは解き明かすことが出来ないという性質を帯びているのである。

この曖昧模糊な部分についてよく考えてみよう。人は知らず知らずのうちに、誰から煽動されるわけでもなく、「こう考えた方がしっくり飲み込める」という物事の受け止め方の枠組みを集団の内側で共有するようになる。その枠組みに基づいて、個人は（政治的なことも含めて）個別の事象を認識し評価し、その事象に対する何らかの感情を抱くものである。もちろん、こうした認識の枠組みはどこまでも枠組みにすぎず、そこから逸脱する余地がないわけでない。ただ、世間のものの見方に異論を唱えたり、それと一線を隔する個性的な考え方をすること自体、一般的な枠組みがあってはじめて可能となる。この点からいっても一般的な評価や認識の枠組みというものは無視しがたく、どのようなかたちであれ深層レベルで人々に影響を与えるはずである。

この章では特に韓国社会の場合を取り上げて、評価と認識の枠組みの側面から人々の「反日感情」を論じてみよう。

1 評価

——対象と基準の相違——

親日現象の光景

「反日感情」について考えるとき、私たちが必ず不可解に感じることがある。中国の場合でも韓国の場合でも、「日流」とまで呼ばれる親日現象が私たちに同時にみえていることである。漫画、歌謡曲、テレビドラマ、ファッションといった日本の大衆文化は、韓国においても特に若い世代に好まれている。「イルボン・ビル日本 feel」と称してもてはやされる日本風のファッションに身を包んだ若者が、メニューの豊富な日式の「イチャカヤ」（居酒屋）や、「酒」と書かれた赤提灯の「オデン・バー」に集まり、安室奈美恵や中島美嘉の「チェイ・パフJ-POP」を聴きながら、熱焔を片手に宮崎駿のアニメ評をしているなどという光景は、ソウル

の街のいたるところで毎日くり広げられている。

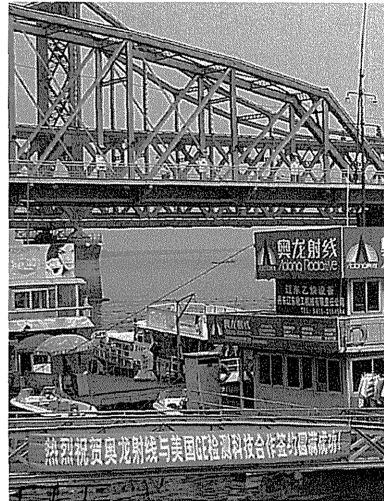
若者層だけではない。「家電製品はやはり日本製にかぎる」という発想はいまでも中高年層によくみられる。また、日本人の礼儀正しさや社会秩序の良さを礼賛する意見は、世代を越えて韓国人の主流を成しているし、箱根や大阪城やハウステンボスなどの日本の観光地には、韓国人観光客が溢れ、いつの間にか日本人よりも目に付くようになった。韓流ばかりが話題を呼んでいるが、国民1人当たりの経済規模でみれば日流が韓流の数倍にのぼっていることだってわかる（韓国『來日新聞』2007年5月22日付22面参照）。こういった親日現象を目の当たりにすれば、「反日感情」との間に矛盾を感じる読者も多からう（図10-1）。

だが、親日現象と「反日感情」とは本当に矛盾するのだろうか。親日現象は、日本の大衆文化や、物品、ないし日本人の気質の長所に対する評価によるものであって、日本という国家や、韓国の国史の「物語」に登場する「日本」というものに対する評価ではない。つまり、実は評価の対象がまったく違うのだから、もともと矛盾も何もないと筆者はいいたいのである。日本の大衆文化を愛好する韓国の人々の口からも、たとえば「村上春樹の小説は好きだけど、日本は嫌い」といった意見が頻繁に聞かれるが、こうした発言こそが、親日現象と「反日感情」の関係を如実に表しているといえよう。現象を精緻にみつめ、より深く知っていくためには、人々がその都度に評価している対象が何なのかを見極めることが、まず不可欠である。

反日感情の光景

私はこれまで、「反日感情」とは韓国の国史の「物語」に登場する「日本」への評価の問題であると述べた。物事の評価がどうなっているのかを紐解こう

図10-1 中国丹東市の光景



丹東は、川を挟んで北朝鮮に接し、朝鮮戦争の際に義勇軍の出兵の地となっていた。このため後の中国では「抗美援朝」（米国に対抗し北朝鮮を援助すること）の「英雄都市」となった。その「抗美援朝」の象徴であり、国内の観光客で賑わう「鴨綠江断桥」のたもとには、皮肉なことに米国の技術協力を歓迎する横断幕が掲げられていた。（2007年9月、筆者撮影）

とすれば、重要なのは、それが何を対象とし何を基準とした評価なのかである。「日本」はどのような基準で何に対する評価に掛けられているのだろうか。

まず1990年代後半に筆者が頻繁に体験したことを描写してみたい。当時、筆者は学部生で、所属していた学生団体の訪韓使節の一員としてはじめて韓国の地を踏み、それを期に日韓の学生たちの交流事業を担当するようになっていた。ほとんどの交流会で両国の学生たちが話題にしたのは竹島問題だった。その録画記録をもとに、学生たちの議論を紹介してみよう。

日本人A 「私は（竹島を日韓で）共同統治すべきだと思います。平和的に経済利益を分かちあうのです」

日本人B 「私もそう思います。そうすれば、竹島は日本と韓国の友好の象徴になるでしょう」

韓国人1 「待って！ なぜ日本が獨島について権利を主張するのですか？ わが国の土地なのに」

韓国人2 「日本人は若い世代まで侵略の歴史をくり返そうというのですか！？ ガッカリです」

(1996年9月)

学生たちの議論のほとんどは、このように平行線をたどった。この録画記録の最後は、会場を後にする日本人学生のつぶやきで終わっている。「議論にならない。反日感情でものをいう相手と生産的な話なんて出来ないよ」。

このような決別は、実際のところ竹島領有権問題に関する議論に広くみられるばかりか、日韓関係そのものに関する議論でも頻繁に起きている。たとえば植民地支配の功罪に関しては、日本は朝鮮の社会資本を近代化し、他国の侵略や戦争による被災を防いだという意見が出るかと思えば、逆に日本は豚々とした韓民族の歩みと誇りを踏みにじったという反論が出る。

こうした議論は、同じテーブルで、同じ対象に関しておこなわれているが、話自体がかみ合っていない。日本人は「平和」と「経済」に着目しているのに対し、韓国人は「歴史」と「理念」に着目している。つまり、評価の対象がまったくズレているのだ。

海外メディアから「エコノミック・アニマル」と腐されて久しく、国内でも従来の平和主義について再考が叫ばれるようになった今日でも、日本人は「平

和」と「経済」を優先的に考える特徴を持つ。他国の人々と比べると、私たちは誰から暗示を掛けられたわけでもないのに、この2つをはじめ幾つかのことに対して、強い思い入れを持つ傾向がある。普段は意識していないが、それが私たちの思考において重要な評価の基準になっている。文化が、特定の人々をして特定の情報に傾倒させ、あるいは特定の情報を無視させるもの（韓, 2003: 21）とすれば、日韓の間に評価の基準の違いがあっても当然である。

決して極端に戯画化するつもりはないが、韓国社会は現在の事象を考える際にまず「歴史」を参照し、「理念」としての正しさに言及するという傾向がある。ここで読者は思うだろうか。「では、歴史を明らかにすればいいではないか。歴史はほんらい1つであるのだから、科学的に糾明すれば日韓の紛糾も解ける」。実際にその考えは、日韓両国で数々のあたらしい歴史解釈の動きを生み、反面ではお互いを「歴史の歪曲者」と罵りあう事態も招いている。ウェブサイトという便利な場で、その主たるユーザーである若者層を中心に、特に激しく飛びかっている相互への叱咤や鞭撻ないし罵詈雑言の数々も、この様相を呈している。

歴史とははたして何だろう。動かざる史実というものが実在し、それだけで織り上げられたものが歴史なのか。そうではない。何らかの事件は、発生した当時においても、それに接する人々の立場や見方によって、すでにいろいろな様相を呈している。1つの確たる史実が存在するとはいいい難い。かりに事件ごとに1つの史実が実在したとしても、事件と事件との間に因果関係を認め、それを歴史というかたちに織り上げて語るためには、誰かしらの視点、何らかの恣意性が介入してしまう。歴史⁽²⁾ (history) というものは、ほんらい「物語」(story) としての性質を持つ厄介な代物なのだ。

歴史究明のこの厄介さにみられるように、唯一の真実が実験などの手法で実証できない場合、社会は「専門家」とか「有識者」といわれる人々にその困難を託すことになる。竹島問題や教科書問題に関しても、多種多様な人材に意見が求められてきた。専門家や有識者のこのような社会的活動を、ストラサーンをはじめとする人類学者たちは「オーデッティング」(監査)と呼んでいる(Strathern, 2000)。社会で意見わかれとなった案件には、社会公認の専門家がその知見と権威で唯一の真実を選び示すというのである。

だが、オーデッティングによっても日韓の溝を埋める唯一の史実などみつからないことが多い。一般に、専門家のオーデッティングは社会の期待に反しな

いかたちで進められる（Pels, 2000）からである。現に韓国では、「反日感情」の原因とされる数々の史料に対して、既存の認識とは別な見解を示す専門家がたびたび登場している。たとえば2007年の前半にも、ソウル大学経済学科のある韓国教授が「従軍慰安婦は売春業」「強制連行は嘘」「日本による収奪はなかった」などの見解を次々と発表し、韓国の多様なメディアで報道された。しかし、この見解は社会の認識の転換をもたらすことなく、むしろ嫌悪感をつのらせたのみであった。韓国社会からすれば、しっかりと飲み込めない、グロテスクな話と受けとられたからである。

別々の基準で物事を評価する人同士の間では、どういう補助装置を使っても、すぐには議論が成り立ちにくい。このことは、韓国人と日本人との間にかぎったことではない。韓国人、あるいは日本人同士の間でも、いつも起こりうることである。

2 認識

——美德と悪徳の物語——

では、現在までの韓国社会で一般的にしっかりと飲み込まれている国史の「物語」とはどういったものか。その文化的な特性を挙げつつ、国史の中で「日本」に与えられたキャラクター（劇中人格）を紐解いてみよう。

美德と悪徳の現代韓国史

日本による植民地時代を1945年に脱した朝鮮半島は、内政面で共産主義と資本主義の勢力抗争に荒れる一方で、列強諸外国の思惑も深く絡んで、絶え間ない政治抗争の場と化した。1948年の「南北単政樹立」により統一国家建設の望みは挫折し、1950年に勃発した朝鮮戦争が3年後に休戦を迎えたあとも、半島の2つの国家は半世紀にわたり反目しあうこととなった。資本主義の韓国では、1993年の文民政府樹立まで李承晩・朴正熙・全斗煥・盧泰愚らの軍事政権による独裁統治が続き、他方で民主化運動を中心とした民衆運動が人々の暮らしの中で培われた。

この間に造成されたのが、人々の日常生活を国史と深く結びつけて考える世界観であり、歴史主体の二元論的な認識方法である。伝統的な階層や宗教に関しては「ヤンバン 常民」ないし「サンミン 儒教一巫俗」の歴史的な葛藤という二項対立

的な「物語」づくりが進み、社会文化のオーデッティングもこの二元論を踏襲するかたちで進んだ(cf. Itoh, 2001)。「慶尚道—全羅道」というかたちをとった地域対立についても同様で、この2地域は京畿道・忠清道・江原道というその他の地域よりも明確な劇中人格を与えられて物語られてきた(cf. 真鍋, 2000)。そして政治史の認識についても、「列強諸外国—韓民族」「圧制者—民衆／民主主義」などという対比を用いて、韓国社会が置かれた状況が、その都度、歴史的・理念的に説明されてきた。

この二項対立に関して注目すべきことは、両者の間に権力の優劣関係がみられ、人々の認識においてはその優劣が戯画化されて極端に強調されているということである。つまり、両班が常民を、儒教が巫俗を、慶尚道が全羅道を支配的に包摂してきたというように、常識的な認識の枠組みが形作られている。列強諸外国や圧制者も、民族や民衆に対して優位な権力を発揮する位置に据えられ、そうした優劣関係の二分法によって、韓国社会の過去と歴史的現在が寓話化されてきたわけである。

「物語」の中で弱者に寄せられる評価は、同情的で好意的なものになりがらである。特に、日常生活に根ざした人々が抑圧からの自由を求めて起こす抵抗というものをロマンティックな「物語」とみなすというのは、広く人類に共通した文化的傾向となっている(Abu-Lughod, 1990)。「物語」の中の弱者には、後日になって数々の英雄が発見され、その美徳が伝説となっていく。それとともに、英雄その人が、やがて彼／彼女の属した弱者集団が、さらには二項対立の弱い方そのものが、美徳の正統的な継承者としての地位を確固たるものにする。現代韓国史の中から例を挙げれば、労働者の搾取禁止を叫んで1970年に抗議自殺した^{チョン・テイル}全泰壹は、韓国社会の歴史的脈絡を物語るためにその人物像を構築され、抑圧下の民衆を立ち上がらせた「^{ヨルサ}烈士」という美徳の具現として、国史の「物語」に吸収されていった(真鍋, 1997)。

また、反対に強者はスティグマ化され、そのすべてが悪徳として塗り固められていく。たとえば中華人民共和国における文化大革命の状況下で繰りひろげられた特定分子の弾圧や、日本人残留孤児たちが受けた処遇なども、国史の「物語」で悪徳が作られてきた過程を示しているだろう。

時には、たとえば韓国語における「民衆」の^{ミンジュン}ように、その指示対象が何なのかを明らかにすることもなく、ただ絶対的に正当かつ正統である存在を表すものとして、言葉だけが独り歩きする場合もある。また、逆に「アカ」(^{パルクエンイ}共産主義

者)や「新自由主義^{シンジャユジュウイ}」という言葉のように、その原義を解さない人々にも、ただ単に「何かしら悪い連中」とか「かかわってはいけないもの」とか「とにかく批難すべき対象」として受け止められ、物語られていくものもある。その典型が「IMF^{アイエムエフ}」である。1996年からのアジア同時経済不況の末に、韓国は国際通貨基金 (IMF) による経済管理体制へと突入した。しかし、「IMF」という言葉はここで独り歩きを始めた。「IMF 克服」が叫ばれ、日常生活の諸般の困難が「IMF のせいで」と説明され、まさに「何かはわからないけれども、悪いもの」という悪徳のキーワードとして人々の口にのぼるようになった。こうした勧善懲悪的な寓話化を通して、人々は状況を認識し、歴史を叙述することが出来るわけである。この認識や叙述の方法は、複雑に絡み合った現代の社会事情を人々がとりあえず理解する上で簡便である。自分たちの過去の歴史や歴史的現在にかかわる各キャラクターの所業をいちいち自分自身で吟味してみるなど、日常生活に追われる者にとっては不可能に近い煩雑な作業だからである (太田, 2002, 2003)。

イルボンのキャラクター

韓国社会が「IMF」談義に沸いた頃、ソウルのある地下鉄駅にこんなポスターが掲載されていた。

日帝から独立して52年。わが国は再び外国勢力によって統治されようとしています。IMF に反対しましょう！ (1998年7月)

IMF は外貨準備高が不足する韓国に融資をおこない、国家経済が軌道に復帰することを助けようと経済管理をしたのであり、それを要請したのは他ならない韓国政府だった。しかし、韓国社会において「IMF」は以上にみるように悪徳化されていった。韓国語で「日本」のいいかえとして使われていた過去があり、現在でも時どき使われている「日帝」(イルヂェ)という言葉は、現代韓国史において十分な悪徳キャラクターであり、それと同じく民族自決や民衆生活を抑圧するものとして語られた「IMF」に、美德の座などありえなかった。「日帝」も「IMF」も、民族や民衆や民主を支配的に包摂する外来権力者のキャラクターだからである。

韓国人にとって「日帝」が悪徳キャラクターでしかないことは、私たちにも

十分に予想しうることであろう。では、「日本」はどうか。「村上春樹の小説は好きだけど、日本は嫌い」というとき、その当人は「日本」という言葉で具体的に何を示そうとしているのか。ふとした会話の中で、筆者の友人は答えてくれた。

小泉かな。靖国神社に参拝する政治家？ ……なんか違う。わが国を植民地支配した日帝？ そのときにわが国の人々に悪いことをした日本人？ でも、それっていまの日本そのものじゃないよなあ。あれ？ 何だろう ……。(2005年9月3日)

このような発言はとても正直なものだが、一般的な語りとはいいいがたい。筆者が聞いたほとんどの答えは、むしろ自分が嫌う「日本」をもっと明確にいいかえようという努力に満ちていた。ただ、それらの発言は、同席した他の韓国人にすらも、「なんか違う」と思いながら詭弁を連ねているだけに聞こえる場合が多い。息子が日本人と結婚した50代後半の韓国人女性はいう。

お世辞じゃなく、うちの嫁は最高よ。(中略) 嫁が来てから家に日本人がたくさん遊びに来るようになったけど、みんな愛嬌があって、礼儀正しくて、良い子ばかりだわ。でも、私が日本を好きでないことは変わらないの。だって……。

彼女が長々とした話は、どうも行き当たりばったりといった体裁で、はっきりした趣旨が感じられないものだった。彼女の夫が割って入る。

いま君がした話は本当に無理押しだよ。(中略) でも、君の気持ちは理解できる。日本がなんでそんなに悪いのかなんて、普段は考えることもないからね。この国で「日本万歳」みたいな姿勢で生きるってことは、とても不自然だし、難しいことだしね。(2002年6月27日)

もっと冷静な意見もみられる。筆者の友人で、特に日本びいきなわけでもない30代の男性は、ウェブサイトの掲示板に「何でも日本のせいにすれば済むと思っているこの国が嫌いだ」という書き込みをしたことがあった(2003年12月

図10-2 中国長春市の光景



長春は旧日本の傀儡国家「満州国」の首都だった。執政府にして皇帝居所だった施設は、後日「偽満皇宫博物院」となり、主に当時の親日派たちについて批判的な展示をおこなってきた。2006年9月になって旧日本の所業と「抗日」を主題に同じ敷地内に併設された「東北沦陷史陳列館」は、現代中国で重要なのは国民分裂の話ではないといわんばかりである。(2007年9月、筆者撮影)

が必要となる(図10-2)。

それと同じく、韓国語で「日本」といえば、他の言語で「日本」というのとは色合いが違う。既述の悪徳「日帝」のいいかえとして、国史の中ですでに「はっきり何のことはわからないけれども、とにかく悪いもの」としての悪徳のニッチに収まっている「日本」を、韓国人が「好きだ」というためには、それなりの長い補足説明が必要であり、「嫌いだ」というには何の説明もないのである。こうして悪徳のニッチに据えられているのは「日本」だけではない。特に近年、米国を示す「^{ミゲク}美国」という言葉は、「日本」がゆるやかに悪徳のニッチを脱していくのと対照的に、悪徳としての性質を強めていっている。「反美感情」が語られてもおり、もちろん同時に親美現象もみられる。

5日)。しかしそんな彼すらも、友人たちが集まった席で「日本に搾取されていなかったら、きっと韓国が先進国になるのは20年も30年も早かったはずだ」と熱っぽく語り、「日本人に虐められたわが国の人々の気持ちがわかるか」と筆者に迫り、「だから俺は日本が嫌いだ」と豪語することがあった(2004年1月1日)。

どんな言語にも、その言語を話す人々の歴史的現在が込められている。このため、たとえば日本語で「タヌキ」といえばオッチョコチョイで可愛い役回りであったり、ロシア語で「ドイツ人」といえば「口の利けないヤツ」という意味になってしまったりする。「タヌキのくせにずる賢い」や「タヌキらしく愛嬌がある」とは容易にいえでも、「タヌキのくせに愛嬌がある」とか「タヌキだからずる賢い」というには、相当の補足説明

3 感情

——他者の気持ちを理解すること——

感情論

韓国の人々が「反日感情」を持つようにみえる理由は以上のように説明できるとしても、読者は「反日感情」について彼／彼女らと等しく理解することが出来るだろうか。「説明」(explanation)と「理解」(understanding)との間には、決してイコールでは結べない関係がある(Wright, 1971=1984)。特に「感情」(emotion)については、その理解し難さを多くの人類学者が論じてきた(ex. Rosaldo, 1980)。以下では、1980年代に急展開した人類学的な感情研究を整理したアブルゴッドとルッツ(Abu-Lughod & Lutz, 1990)が、それらの主要な切り口として挙げた3点に準じて、「反日感情」が日本に住む私たちにとってどのように説明可能であり、またいかに理解不可能なのかを考えてみたい。

第1に、人間が持つ感情とは、歴史的に展開し、それを表現する言語として構築されてきたという。本章もこれまで特にこの点から「反日感情」というものを扱ってきた。

第2に、感情とは、たとえ似たものであっても文化ごとに違っていて、場合によっては翻訳すら不可能だという。たとえば、韓国の人々が「反日感情」と関連づけて頻繁に語る「恨」という感情がある。「恨」とは、あえて日本語に置き換えるならば、果たしえなかった夢や叶わぬ願いへの感情であり、自己の生きる力へと昇華されるものだという。しかし、同時にそれは復讐を呼ぶような感情(「怨」)とは区別されるべきとされる(李, 1978)。この感情は、いくら文章で説明してみても、私たちが直感的に感じるとは思えない。

第3に、感情とは、社会的な「言説」(discourse)として構築され、その社会で実践されるものだという。アブルゴッドとルッツはフーコーの権力論を援用し、このような感情の言説は、国家的なものであれ日常的なものであれ、権力関係の確認や、権力そのものの行使と呼んでよいと考える。「恨」に関しても、韓国人の日常生活における感情をいい表すものとしては、頻繁に使われてはいない。むしろそれは、韓国・朝鮮人が受けた抑圧に対する抵抗の感情として、あるいは「日本」や「美国」を共通の敵として団結を図ろうとする政治的・戦略的な場において、この民族のみが感じる事が出来る感情だという固有性を

意識し妄信しつつ、使用される表現なのである。

感情の第1の特徴である国史というものが、私たちにとって飲み込みやすい「物語」とは大きく違いうることは述べてきた。それと同じように、第2や第3の特徴も私たちには説明を聞いても理解しがたいものだということがわかる。

相互作用論

しかし、「反日感情」には私たち自身が意外なかたちで加担している。この点は、そもそも「反日感情」が存在するかどうかという根本的な疑問を立ててみれば明らかだろう。

テレビや新聞の報道に目をやれば、海上保安庁の制止を振り切って「島」に上陸する人々や、日本の政府や政治家を罵る人々、日章旗や日の丸を燃やす人々が目に入る。こうしたとき、確かに私たちは「反日感情」というものに触れている気がする。筆者自身も、「反日感情は本当のところ存在しない」とまですぐいいきることは、決して出来ない。

だが、これらの可視的な事件は「反日感情」というものと直接的には結びつかない。可視的な行為が目的としているのは、竹島の領有権を主張する日本政府に対する抗議であったり、靖国神社への参拝に対する批難であったり、韓国に対する蔑視発言の糾弾であったりと、具体的には多種多様だ。「反日運動」となると、現在のところおこなわれていないし、そうした運動が成り立つと考えることすら難しい。

具体的で多様な行為を「反日感情」によるものとしてラベリングするのは、それをみる側なのである。日本にかんする何かの抗議行動が大々的におこなわれた際に韓国のニュースで取り上げられるのは、抗議行動そのものだけではない。それを受け止める日本社会の様子も合わせてニュースとなることが多い。このとき、抗議行動を伝える韓国人と日本人は、等しくそれを「反日感情」の発露だといった習わす一種の共犯関係を結ぶのである。そうして、これら行為の源泉が「反日感情」にあることや、「反日感情」が確かに存在していることが、日本人はもとより韓国人の心の中にすら、ますます既成事実化されていく。他者の感情という理解できないものにラベルを貼るという行為が、自己の感情にラベルを貼るという行為と相互に作用することによって、「反日感情」の言説は構築されていくのだ。

ここで不可解なことがある。もしもフーコーがいうように、感情の言説化を

権力関係の確認や権力の行使と呼んでよいとすれば、他者の感情を言説化する日本側のメディアや知識人たちも、何らかの権力を招来し強化していることになる。それが誰のどのような権力であるのかは、複雑かつ埒外の問題であり、本章で説明する余裕はない。少なくとも、日本側が抱えている「嫌われている」という感情は、韓国側の「嫌う」感情と同じく文化的な問題なのだ。それが、「反日感情」にまつわる社会状況の一角を担っていることを忘れてはならない。

「嫌われ」「嫌う」感情の相互作用をさらに感じ取ってもらうために、別の例を挙げよう。近年の日本や米国社会でじっくり飲み込まれた「物語」の中にも、まさに悪徳としてのキャラクターを与えられた国家はある。北朝鮮だ。政治家や行政官たちの目論見はどうであれ、私たち市民がほんらい批難しているのは、拉致被害に対する北朝鮮政府の政策だったり、国際平和を脅かす核開発であったり、北朝鮮の国民に対する人権蹂躪であったりする。ところが、「北朝鮮」ないし「キタチョー」といえば、そのすべてが否定されて当然のような、まさに悪徳のニッチに収まっていることが読者にも感じ取れるだろう。一方、六ヶ国協議のたびに北朝鮮が要求してきたのは、「テロ支援国家」などの呼び方で北朝鮮を「悪の枢軸」としてスティグマ化するのを撤回しろということである。ニュースをみる日本の人々はこの点をあまり深く考えないようだが、北朝鮮側のこの要求をいま一度捉えなおすならば、「反朝感情」が私たち自身の眼前にも明確に浮かび上がり、同時に「物語」の中の悪徳がどう評価され認識されるのかについて、読者も捉えやすくなるのではなかろうか。

寛容の努力の果てに

そもそも外国の政府や政体に嫌悪感を持ったり、そこに暮らす人々を異質な目でみるのは、「反日感情」にかぎったことではない。どこの国や地域でも外国に対する反感は認められる。この現実に対し、「もっと理解しあって、みんなが仲良くなれたら」と願う読者も多いだろう。しかし、他者の感情を同じく感じえない人間にとって、それは容易なことでない。では、せめて「一見してワケのわからない相手にも、それなりの理屈と言分はある」という考え方がもっと広まったらよいのだろうか。「理解は無理でも、説明によって社会に寛容な態度を広められたら」と勇み立つのは、人類学を専攻しはじめた若い学生たちにもよくみられる傾向である。

私たちが生きる近代以後の社会では、他者を自己と等価な存在として、二者の間の物理的・精神的な通路をみいだす努力が繰り返されてきた。まさに、「ワケの分からない相手にも、理屈⁽³⁾と言いつ分はある」という考え方が広められてきたのである。ところが、この希望の追求にも実は賛否両論がありえる。たとえば、こんな希望を持つこと自体を、近代以降の人類が抱いた欺瞞として批判することも可能だし（永井，1991），さらには市場拡大のために周延的な存在を自己の内側へと取り込んでいく資本主義システムの必然的な帰結だと切り捨ててすることも出来る（Wallerstein, 1983=1985）。自国社会に根づいた対外感情によって動かされまいと思う人々にとって、また反対に外国社会に根ざした対自感情によって動揺すまいという人々にとって、これは痛い批判である。

しかしながら、他者の自己に対する認識や評価の方法について考えを深め、対外感情についてよりよく知ることは、やはり大きな意味を有する。

韓国に暮らす日本人の間には有名な風評がある。それによれば、ほんらい騎馬民族の血を受け継ぐ韓国人と、その血が薄い日本人とでは、感性のリズムが違うという。韓国人が馬の駆けるリズムと同じ三拍子で躍動するのに対して、日本人は基本的に二拍子なのだそう。しかし、三拍子と二拍子は公倍数の六拍子で出会うことが出来る。だから、無理に全部を合わせようとするのではなく、ときどき息が合えばいいし、そうした「ときどき」を喜びあえば、それでよいのだというのである。

私はこの風評を積極的に受け入れてみたい。日本と韓国の人々は認識や評価や感情の枠組みを共有することなど出来ないかもしれない。けれども、互いの異なる枠組みを認めあうことによって、共通点や合意点という公約数だけではなく、心地よい距離感をもたらす公倍数を探索しつつ生きることが可能ではないか。そう信じて本章を閉じよう。

注

- (1) このような「国民全体や国民全体の中の一部集団に共有されている政治的現状に関する認識的、感情的、評価的な政治的傾向」が、一般的に「政治文化」と呼ばれている（Almond, 1975: 35）。
- (2) このため、歴史叙述の専門家である歴史学者も、特に近代以降の歴史の叙述に関しては、「物語」の相対性に立脚する人類学者との共同作業を重視するケースが多くなっている。詳しくは、森（2002）を参照のこと。
- (3) この希望を追及し、他者を隣人として愛するという「人間の可能性」を探索したのはレ

ヴィナスだった。日本語で入手しやすいものとして (Levinas, 1974=1990) や (Levinas, 1961=2005) がある。

文献

- Abu-Lughod, Lila, 1990, "The Romance of Resistance: tracing the transformations of power through Bedouin women," *American Ethnologist*, 17 (1): 41-55.
- Abu-Lughod, Lila & Catherine A. Lutz, 1990, "Introduction: emotion, discourse, and the politics of everyday life," L. Abu-Lughod & C. A. Lutz eds., *Language and the Politics of Emotion*, Cambridge University Press: 1-23.
- Almond, Gabriel A. 1975 *Political Development: essays in heuristic theory*, Little Brown.
- 崔吉城, 2002, 『「親日」と「反日」の文化人類学』, 明石書店
- 韓敬九, 2003, 「현장으로 가자 (現場に行こう)」韓国文化人類學會 (編) 『처음 만나는 문화인류학 (はじめての文化人類学)』一潮閣: 32-48
- Itoh, Abito, 2001, "Japanese Research on Korea," *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 2: 39-64.
- 李御寧, 1978, 裴康煥訳『恨の文化論——韓国人の心の底にあるもの』学生社
- Levinas, Emmanuel, 1974, *Autrement qu'être, ou, Au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff. (=1990, 合田正人訳『存在するとは別の仕方であるいは存在することの彼方へ』朝日出版社)
- , 1961, *Totalité et infini: essai sur l'extériorité*, Martinus Nijhoff. (=2005, 熊野純彦訳『全体性と無限』岩波書店)
- 真鍋祐子, 1997, 『烈士の誕生——韓国の民衆運動における恨の力学』平河出版社
- , 2000, 『光州事件で読む現代韓国』平凡社
- 森明子, 2002, 「序論 対話への期待——文化・歴史・権力」森明子編『歴史叙述の現在』人文書院: 7-32
- 永井均, 1991, 『魂に対する態度』勁草書房
- 太田心平, 2002, 「〈新自由主義〉——韓国のある教会に見た悪徳づくりの過程とその影響」『年報人間科学』23: 95-114
- , 2003, 「政治と発話——現代韓国の政治文化を構築する『誤解』」『民族学研究』68-1: 44-64
- Pels, Peter, 2000, "The Trickster's Dilemma: ethics and the technologies of the anthropological self," Marilyn Strathern ed., *Audit Culture: anthropological studies in accountability, ethics and the academy*, Routledge: 135-172.
- Rosaldo, Michelle Z., 1980, *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life*, Cambridge University Press.
- Strathern, Marilyn ed., 2000, *Audit Culture: anthropological studies in accountability, ethics and the academy*, Routledge.
- Weber, Max, 1922, "Soziologische Grundbegriffe," *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr: 17-46. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店)
- Wallerstein, Immanuel, 1983, *Historical Capitalism*, Verso. (=1985, 川北稔訳『史的

システムとしての資本主義』岩波書店)

Wright, Georg H., 1971, *Explanation and Understanding*, Routledge and K. Paul. (= 1984, 丸山高司・木岡伸夫訳『説明と理解』産業図書)

【Further Readings】

菅原和孝, 2002, 『感情の猿＝人』弘文堂

他者が抱く怒りや恐怖などの感情を人は理解できるかという問題について、関連諸学問の立場も含めつつ、文化人類学者が日本語でわかりやすく整理している。

中川敏, 1994, 「インドネシア語政治作文入門」関本照夫・船曳建夫編『国民文化が生まれる時』リブレポート: 239-268

インドネシアという国民国家において「歴史」というものが持つ政治性を、そこに含まれた美徳の属性に着目することで構造的に整理した論文。

高原基彰, 2006, 『不安型ナショナリズムの時代——日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』洋泉社

近年に高揚する中韓の「反日感情」や日本の「嫌韓・嫌中」の源を、各国の若者世代が抱く失業不安や既成世代に対する反発という共通点に探し出している。中国や韓国の状況描写には大きな疑問がいくつも残るが、日本の状況も相対化して展開する分析には特に一読の価値がある。

高崎宗司, 1993, 『「反日感情」——韓国・朝鮮人と日本人』講談社

近・現代の日朝関係史を専門とする気鋭の歴史学者が、一般的に「反日感情」の原因だとされている諸般の事項について再検証していく。本章では取り上げなかった切り口も求める読者に。

李青若, 1997, 『在日韓国人三世の胸のうち』草思社

日本人が韓国人の「反日感情」と身近に接する機会として無視できないのが在日コリアンの存在である。哲学を専攻する在日韓国人三世の大学院生が、当事者として綴ったエッセイ。